

## ジャック・ロンドン作 「キーシュの息子キーシュ」

大 矢 健 訳

「だから、これらをここに置く。暖かく二重織りの毛布が六枚、大きくて頑丈な<sup>やすり</sup>鑊が六本、切れ味するどく長いハドソン・ベイ・ナイフが六本、物作りの神様モグムの手になるカヌーが二艘、肩が大きく引き綱に強い犬が十匹、そして拳銃を二丁。一つの銃の引き金は壊れているが、それでも優れた銃であることには間違いがなく、修理可能。これを私は提供する」

ここでキーシュは言葉を切り、取り囲む人びとの顔を眺め渡した。漁<sup>たけなわ</sup>労<sup>たけなわ</sup>酬<sup>たけなわ</sup>の時のことである。グノブに娘スースーの値を、キーシュが問い質しているところだ。所はユーコン河のほとり、セントジョージ・ミッション。ここまで何百マイルもの旅をして、いくつもの部族からインディアンたちが集まって来ていた。北、南、東、西。あらゆるところから、トジカカトや遙かタナナウからも、彼らはやって来ていた。

「更にてである。グノブよ。そなたは、タナナウ族の族長である。そして、私、キーシュの息子であるキーシュは、スランゲット族の族長だ。それゆえ、私のタネがそなたの娘の腰から芽を出すとき、二つの部族のあいだには友好関係が生まれることになる。これは大いなる友情であり、それゆえタナナウ族とスランゲット族は、将来にわたり血のつながった兄弟となる。私は言ったことは実行する男だ。ぜったいにする。さあ、どうだろう、グノブ」

グノブは、憂慮の色を浮かべながらも頷いた。日焼けしてごつごつになり、高齢ゆえに歪んだ彼の顔は、その内に秘められた魂をうまい具合に隠してい

る。細い目は、まるでその裂け目の奥で燃える二つの炭のようだ。彼は高い割れた声で言った。「じゃが、それで全部ではあるまい」

「もっとほかにも寄越せと？」とキーシュが訊く。「じゅうぶんな代金であると思うが。タナナウ族の娘で、これ以上の値をつけた女などいるのか。だとしたら、その女の名前を教えてください」

周りの男たちが、隠そうともせずニタニタ笑いをした。これでキーシュにも、自分が辱めを受けているのだと分かった。

「違う、そうではないぞ、キーシュ。お前には分かっておらん」。グノブは優しく、なだめるような仕草をした。「値は適切なのだ。良い値段だ。そして、銃の壊れた引き金についても、疑っているわけではない。だが、それで全てであるはずがない。お前の男らしさはどうなのじゃ？」

「そうだ、お前の男らしさはどうなってるんだ！」と、周りの者たちも嘯みついた。

「噂によれば」とグノブのかん高い声が続ける。「噂によれば、キーシュは父や先祖のような生き方をしておらんそうではないか。異人の神のあとを追い、キーシュは暗闇の世界で彷徨っているという話。怖がるようになった、ということじゃが？」

キーシュの顔は紅潮した。「それは嘘だ」と大声を出していた。「キーシュは、誰も怖がったりはしない！」

「噂によれば」とグノブは高い声で続ける。「お前は、あの『大きな家』ビッグハウスの白人の話に耳を傾け、白人の神を敬っているらしい。そして、白人の神は血が流れることをお嫌いになっているらしい」

キーシュは、視線を落とした。こぶしは強く握られている。取り囲んでいた未開の男たちが、馬鹿にしたように笑う。部族の聖職者、薬職人でもあるまじない師のマドワンが、グノブの耳元で何事か囁いた。

まじない師は、焚き火の光が届かない暗闇を探し回り、痩せた少年を引きずり出してきた。キーシュの目の前に少年をつき出し、キーシュの手にナイ

フを握らせた。

グノブが前に乗り出す。「キーシュよ、キーシュ。お前にこいつを殺す勇氣はあるか？ 見て見よ、こいつは、奴隷のキツノーだ。キーシュよ、腕いっぱいの方でこいつを打ってみよ！」

少年は震え、衝撃に備えた。キーシュが彼を見つめていると、ブラウン牧師の崇高な道徳の言葉が頭をよぎる。目に浮かんだのは、ブラウン牧師が彼独特のやり方で描く地獄の業火、その燃え盛る炎だった。ナイフが地面に落ちた。少年がため息をつき、膝を震わせながら焚き火の光が届かないところへ消えていった。グノブの足下には狼犬が腹這いになっている。狼犬は牙を光らせ、少年を追いつきかかるとも思われた。しかし、まじない師の足が獣を押さえつけた。そうしながら、彼はグノブにある考えを伝えた。

「それじゃあ、キーシュよ、こんなことをされたら、どうするのじゃ？」グノブはそう言いながら、サケの切り身を一切れ狼犬のホワイト・ファンクの目の前にぶらさげた。犬が切り身を我がものとせんとしたまさにその瞬間、グノブが狼犬の鼻を棒で強くひっぱたいた。「このあと、キーシュよ、お前はこんなことをするのか？」ホワイト・ファンクは腹這いになって後ずさりをしたが、ご機嫌をとろうとするかのようにグノブの手にじゃれついた。

「聞け！」と言い、マドワンの腕にもたれながら、グノブは立ち上がった。「わしは年寄りじゃ。だが年寄りだからこそ、お前に教えてやる。お主の父キーシュは、勇者だった。戦場においては、弓の奏でる音楽を愛した。わしはこの目で、父キーシュが槍を投げ、それが敵の体を貫いて、頭が吹っ飛ぶのを見たことがある。だが、お前はまったく違う。大鴉族から距離をおき、狼族を崇めるようになってから、お前は血を怖れるようになったのだ。そして、お前は仲間たちにも恐怖することを教えてしまった。これは間違いだ。というのじゃ、わしがそこのキツノーと同じ子どもだったころ、どの土地にも白人など一人もいなかった。ところが、奴らは、一人また一人とやって来て、今ではそこらじゅうにおる。奴らは、落着きというものを知らない

連中だ。お腹がいっぱいになって焚き火の横で休みながらも、満足するということがない。次の日とその日の肉を運んでくるのに任せるということができない。まるで、奴らには呪いが掛けられているかのようじゃ。苦痛も苦難も乗り越えて、働き続けるしかないみたいではないか」

キーシュは驚いた。ブラウン牧師が語っていた曖昧な話が思い出されたのだ。それは、大昔のアダムの話だった。ブラウン牧師が真実を語っていたように思えた。

「だから、奴ら白人は、目に入るものをみな我がものとしようとする。どの土地にも赴き、どの土地をも眼下に収めようとする。ますます多くの白人たちがやって来ている。もし我々が何もせねば、奴らは全ての土地を手にしてしまうだろう。そうしたら、大鴉族<sup>レイヴン</sup>の住むところはなくなってしまう。だから、最後の一人となるまで、我々は戦わなければならない。そうすれば、山道も土地も我々のものとなり、我らの子どもも、子どもの子どもも栄え太ることになる。これから、大きな戦<sup>いくさ</sup>があろう。狼族と大鴉族が戦うのだ。ところが、キーシュは戦わない。部族の者たちに戦うことも許さない。それでは、わしの娘をお前のもとに嫁がせるわけにはいかん。タナナウ族の族長であるグノブは、そう宣言する」

「しかし白人たちは善良で偉大な人びとだ」と、キーシュが答えた。「白人は、多くのことを我々に教えてくれた。毛布もナイフも銃もくれた。我々が作ったこともなく、作れたはずもなかった物だ。白人が来る前の我々の生活ぶりを知っている。まだ私が生まれる前のことだが、父からよく聞いた。ヘラジカ狩にゆけば、槍が届くところまで接近するしかなかった。ところが今では、白人からもらったライフル銃が使える。赤ん坊の泣き声が届かないぐらい先の獲物も仕留められる。また我々は、魚と獣の肉と木の実を食べていた。ほかに食べ物などなかったからだ。そして、塩もなしでそれらを喰った。塩のかかっていない魚や肉の時代に戻りたい奴が、どれだけいるというのか」

ここでマドワンが立ち上がらなかつたとしたら、沈黙がじゅうぶんに行き

わたり、キーシュの言葉が皆の胸に迫って効果的ではあったろう。「一つ質問したいことがある、キーシュよ。あのビッグハウスの白人は、お前に人を殺すのはよくないと教えた。しかし、奴らは人殺しをするではないか。これを我々はよく知っているが。コヨクック川のほとりでの大きな戦いのこと、あるいはヌクルキエトでの戦いのことを、我々が忘れたとでも言うのか。ヌクルキエトでは、白人が三人死に、トジカカツ族の者が二十人殺された。マックルラスの奴が殺したタナナウ族の三人のことを、我々がもう記憶していないとでも？ キーシュよ、なぜか教えてくれ、まじない師ブラウンは、彼の兄弟たちは戦うというのに、なぜ戦うのはいけないことだと言うのか」

キーシュがこの矛盾に悩んでいると、「いや、いや、答える必要などない」と、グノブがかん高い声で言った。「とても単純なことよ。善良なるブラウン牧師が大鴉族の動きを封じ、彼の兄弟たちが我々の羽をむしるためだ」。声がさらに高くなる。「しかしだ、戦いを怖れない男が、あるいは男の子を産む娘が一人でも残っているかぎり、大鴉族の全員が羽をむしられるということはない！」

焚き火の向こう側にいた体格のよい若者に、グノブは話しかけた。「スーの兄であるマカムックよ、お主は何と言う？」

マカムックが立ち上がる。彼の顔には大きな傷跡があり、このため上唇が引っ張られ、いつでも笑っているような表情をしていた。が、これを裏切って、彼の目には獐猛さの炎が燃えていた。「今日、たまたまなのだが」と、わざと無関係をよそおってマカムックは話しはじめた。「マックルラス商人の小屋の横を通りかかった。その戸口で、お天道さまを拝みながら笑う赤子を見た。そして、商人マックルラスと同じ目で、俺のことを見た。怯えていたよ。母親が駆け寄り、あやしていたっけ。そう、その母親はジスカさ。スランゲットの女だ」

怒りのうなり声が起こり、マカムックの声が聞こえないほどだった。マカムックはここで、手を突きだし指弾するようにキーシュを指さした。こんな

大きな演技で、周りの男たちを黙らせたのだ。

「そういうわけか。お前らスランゲット族は自分たちの女を手放すわけだな。そして、タナナウ族のところへきて、女をください、と言うわけか。しかし、俺たちも俺たちの女が必要なんだよ。だって男たちを産んでもらわなければならないからね。大鴉族が狼族と戦う日に備えなければいけない」

喝采の嵐のなか、グノブのかん高い声が響く。「では、スूसーのお気に入りの弟のノサボックよ、お前は何と言う？」

この若者はすっきりした体格で気品に満ちていた。鼻は特徴的な鷹鼻で、この種族の典型のように額が突き出している。しかし何かの神経性の病のためか、片目の瞼だけが、奇妙な間合いで意味ありげに目くばせをしてしまう。ここで立ち上がったときも、片目が閉じ、しばらくそのままだった。しかし今日ばかりは、いつもの馬鹿にしたような笑いは起こらなかった。周りの者たちの表情は、どれも真剣だ。「私もまた、商人マックルラスの小屋に通りかかった」と、彼の柔らかな女のような声が、さざ波のように広がって響いた。彼の声は若者の声であり、姉の声にも似ていた。「汗を流し、その汗が目の中に入るインディアンの女たちを見た。疲労のあまり膝を震わしているインディアンの女たちを見た。商人マックルラスが建てる予定の店のための、丸太の下で苦しんでいる女たちを見たんだ。また、薪割りをしている女も見た。まじない師ブラウンのビッグハウスを長い冬のあいだ温かく保つための薪だ。これがインディアン女の仕事である。タナナウ族の者は、そんなことは絶対にしない。我々は男たちと兄弟だ。我々はインディアン女ではない。しかし、スランゲット族の者たちはインディアン女である」

深い沈黙が訪れた。そして誰もがキーシュを見つめた。キーシュは辺りをゆっくりと慎重に見回し、大人一人ひとりの顔を覗き込んだ。「だから」と思い切って言ってみた。「だから」とくり返した。それから、それ以上は何も言わず、<sup>きびす</sup>踵を返すと暗闇のなかへと消えていった。

這いずる赤ん坊や毛を逆立てる狼犬のあいだをかき分けるように、この大

きなキャンプを進んでいく。そして外れに来たところで、焚き火の光のもと仕事に励む女に出くわした。はびこる蔦の長い根からはぎ取った皮の紐をつかって、彼女は魚取り用の綱を編んでいた。しばらくのあいだ、彼は黙って彼女を見つめていた。ねじ曲がった繊維の無秩序の塊から、彼女は器用な指使いで、法則と秩序を生みだしている。女は美人で、仕事のリズムに合わせて体を揺すっていた。骨太な感じであり、胸は大きく、お尻は母親になるためのそれだった。ちらつく炎の光のなかで彼女のブロンズの顔は黄金色に輝いていた。髪は青がかった黒で、目は漆黒である。

「なあ、スースー」と、とうとうキーシュは話しかけた。「君は、かつて、まだ幼きころ、僕に好意を抱いてくれていたよね」

「わたしが好意を抱いていたのは、あなたがスランゲット族の族長だったからよ」と、彼女は即座に答えた。「それと、あなたが大きくて頑強だったから」

「そうだよ」

「でも、それは魚取りをしていた大昔のこと」と、すぐに彼女はつけ加えた。「まじない師ブラウンがやって来て、あなたに困った教えを授け、あなたの足が知らない場所へ向かうよう導いた前のこと」

「でも、知ってほしいのだけど……」

スースーは片手を振りかざして制止した。その仕草は、キーシュに彼女の父親のことを思い出させた。「キーシュ、あなたが言いたいことは分かっている。だから、答えてあげる。川の魚も森の獣も、自分たちの子孫を残すの。そういうことになっているの。そして、これは良きことよ。人間の女にしても同じこと。女は自分の種族の子どもを残すものなの。乙女であっても、まだ何も知らない乙女であっても、女は産みの苦しみを感ずるし、乳房の痛みや赤ん坊に首もとに触れられる感触を知っている。そしてそんな気持ちが高ぶると、密かに男を探しはじめるものなの。子どもを育てる父親に相応しい男を探すのよ。わたしはそう感じたわ。あなたを見たとき、そう思ったの。」

あのとき、あなたは大きくて頑強で、獣とも人間とも戦うのを怖れない狩人だった。わたしが二人ぶん食べなければならぬとき、肉を持ち帰ってくれる男だった。わたしがもうお腹が大きくて動けないというとき、危険を追っ払ってくれる男だった。でも、それも、まじない師ブラウンがこの土地にやって来る前の話。まじない師ブラウンがあなたに余計なことを……」

「でも、我々のほうが間違っているんだ。正しい教えを僕は知って……」

「殺しはいけない。それね。言いたいことはちゃんと分かっているわ。それでは、あなたの種族の子どもを、あなたは育てなさい。殺しをしない種族を育てたらいい。でもそんな気持ちでタナナウ族のところへ来ないでほしいの。だって、しばらくしたら、大鴉族は狼族と戦争をすることになるんでしょ。よくは分からないけど。男たちのすることだから。でも、そんなときに備えて、男の子を産むのがわたしの仕事だってことぐらいは、わたしも分かっているの」

「スースー、僕の話聞いてくれよ」と、キーシュが口をはさんだ。

「本当の男は棍棒でわたしをなぐって、話を聞かせるわ」と、スースーがあざ笑った。「ところが、あなたときたら」と言って、彼女は根の皮の塊をキーシュにむかって投げた。「わたしは自分をあなたにあげるわけにはいかない。でも、これならあげるわよ。あなたにはお似合いでしょ。それがインディアン女の仕事。編み物をつくるというわ」

キーシュはその皮の塊をわきに投げた。ブロンズの表情の下では、怒りの血潮が泥流のように脈打っていた。

「もう一つ」と、スースーは続ける。「あなたの父もわたしの父も知っていた、古くからの習慣があるわ。男が戦で倒れたとき、そいつの頭皮は記念に持っていかれたの。いいでしょ、これ。でも、大鴉族を一度捨てたあなたは、それ以上のことをしなくちゃいけない。あなたは、わたしのところに、頭皮だけではなく首から上をそのまま持ってこなくちゃいけない。首を二つね。そうしたら根の皮ではなく、勇者の印であるビーズ付きのベルト、剣の鞘、



長いロシア・ナイフをあなたにあげる。そして、もう一度あなたを愛してあげる。そうできたら、全てめでたし、めでたしね」

「すると」とキーシュは言った。「すると」。それだけ言い残すと、彼は向きを変え、光の中へと消えていった。

「違うわ、キーシュ」と、彼の背中にむけてスूसーは叫んだ。「首は二つでなく、少なくとも三つよ！」

それでも、キーシュは改宗後の掟に忠実だった。彼は正しき生き方をし、自分の部族の者たちにもジャクソン・ブラウン牧師の教えを守らせた。漁労の季節のあいだじゅうずっと、彼はタナナウ族に注意を払わなかった。囁かれた隠微な言葉にも、多くの部族の女たちからの嘲笑にも、耳をかさなかった。漁労の季節が過ぎると、干物や薫製といったサケの蓄えをたんまりと作ったグノブと部族の者たちは、次はタナナウ川の上流に狩に出かけていった。キーシュは、彼らが出発するのを知っていたが、教会の礼拝にはきちんと通り、規則正しくお祈りを捧げ、深いバスで賛美歌を歌う際も皆をリードした。

ジャクソン・ブラウン牧師はこのバスの声がお気に入り、キーシュの立派な性格から、彼をもっとも優秀な改宗徒と考えていた。だが、マックルラスはこれに疑いを抱いていた。マックルラスは、異教徒が改宗に成功するということを信じられず、そしてこの意見を口にするのにも躊躇しなかった。しかし、ブラウン牧師は、彼なりの流儀で度量のある男であった。それで、ある秋の長い夜、徹底的に議論した。彼の展開した議論はとても説得力のあるもので、商人マックルラスはどんどんと追いつめられ、進退きわまったところで、最終的にこう宣言した。「俺自身が改宗せず、キーシュが二年間しっかりとキリストの教えを守ったら、俺の脳味噌をリングでかき回していいぜ」。ブラウン牧師はチャンス逃したりしなかった。すぐさま牧師は男らしく手を握りしめて、こう決めた。キーシュの行いがマックルラスの魂の行き場所を決める、と。

ところが、旅ができるほどに大地の雪が固まったある日、知らせが届いた。セントジョージ・ミッションに弾薬を求めてやって来たタナナウ族の男が、こう知らせたのである。スースーがネークーという押しが強い若者の狩人を気に入っているというのだ。ネークーは、グノブの焚き火の横で、彼女をうまいこと競り落としていた。ジャクソン・ブラウン牧師が川へ続く森の道で偶然キーシュに出くわしたのは、ほぼこの頃のことだった。キーシュは、最優秀の犬たちに糧を引かせ、糧紐の下には彼のいちばん大きくて最上級の雪靴をしまい込んでいた。

「キーシュ、どこへ行くのか？ 狩か」とブラウン牧師が、インディアンの話し方を真似て訊ねた。

キーシュは、まるまる一分間は牧師の目をじっと見つめていた。そして犬を出発させたが立ち止まり、もう一度牧師をじっと凝視すると、こう答えた。「いいえ、地獄へ行くのです」

ぼっかりと開けた場所に出た。そこには、寂しげな小屋が三軒の建っていた。驚くほどの孤独から身を守ろうとするかのように、雪の中に潜り込もうとしている。数歩離れたところは、四方を暗い森に囲まれている。頭上に、裸の宇宙で眩しく輝く青い空はない。外の世界を遮り雪雲を湛える、ぼんやりとして霧がかかったカーテンがあるだけだ。風はなく、音はなく、何もなかった。あったのは、雪と沈黙だけだった。このキャンプには、生命を感じさせる動きが一つとしてない。狩に出た一行がカリブーの群を見つけ、たいそうな収穫があり、空腹の時期のあとの豊饒なる祝宴の時を過ごしたのだろう。それで、真っ昼間だというのに、ヘラジカの皮でつくった屋根の下、住人たちは深い眠りをむさぼっていたのだ。

小屋の前には焚き火があった。そこに五組の雪靴が逆さまに吊され、外気にさらされている。焚き火の横には、スースーが腰を下ろしていた。リスの革でつくったパーカのフードが、彼女の髪を覆っている。首もとも、きっち

りと包まれていた。しかし手袋はしておらず、針と獣の腱を使って器用に縫い物をしていた。明るい紫の布地を表にあてた革製ベルトに、最後の一風変わったデザインを刺繍して、完成させようとしていたのだ。小屋の裏にいた犬が短く鋭い吠え声をあげ、始めたときと同じように唐突に吠えるのを止めた。スースーの後ろの小屋にいた父親が、一度、ゴホゴホと咳き込み、眠ったまま何やらブツブツと独り言を言った。「悪い夢でも見てるのね」とスースーがこぼす。「お父さんも歳だし、狩でのあの最後の取っ組み合いがきつすぎたんだわ」

最後のビーズを置いてみてから、腱で縫いつけを始めた。焚き火に薪をくべた。燃えさかる炎をじっと見つめ、そして顔を上げる。靴の立てるクシャ、クシャという乾いた音が聞こえたのだ。火打ち石のように固い雪片を踏みしめる、モカシン靴が近づいていた。キーシュがそばに来ていた。いくぶん前屈みになっている。背中の荷物が重くバランスを取るためだ。荷物には、柔らかく<sup>なめ</sup>鞣されたヘラジカの皮が掛けられている。キーシュはそれを雪の中にぞんざいに落とすと、座り込んだ。二人は、何も言わず見つめ合った。

「長い旅だったでしょ、キーシュ」と、ようやくスースーが口を開く。「ユーコン河沿いにセントジョージ・ミッションからというのは、長旅よね」

「そうだ」と、ぼんやりキーシュが答える。目はベルトに釘付けになっており、その胴回りの長さを測っている。「で、ナイフはどこだ？」と訊いた。

「ここよ」。パーカの内側から取り出すと、焚き火の火にその裸の刃をかざす。「いいナイフでしょ」

「それを寄越せよ」と、彼は命令した。

「駄目よ、キーシュ」と言って、スースーは笑う。「これを身につけられるように、あなたは生まれついていないの」

「寄越せ」と、彼はくり返す。声色に変化はない。「俺は、そう生まれついてる」

媚びるかのように彼を見ていた彼女の目は、ヘラジカ皮の包みに向けられ

た。包みの回りの雪が、ゆっくりと赤に染まっていった。「血なのね、キーシュ」と彼女は訊いた。

「そうさ、血だ。とにかくベルトと、その長いロシア・ナイフを寄越せ」  
急に彼女は恐くなった。それでも、乱暴にベルトを彼が奪うと、興奮した。その荒々しさがたまらなかった。そして、乳房の痛みと赤ん坊が首もとにしがみつく感触を覚えた。

キーシュは、ベルトを腹のまわりに回し、最初の穴にバックルを留めるとニヤリとしながら、こう言った。「これは、俺より小さな男用のものだな」

スूसーも微笑んだ。目つきはさらに優しくなっていた。また、赤ん坊の指を首もとに感じた。キーシュは、見栄えの悪い男じゃないわね。ほんと、ベルトはもっと小さい男用。でも、それが何？ ベルトなんていくらでも作り直せるわ。

「でも、あの血は何……？」生まれたばかりだが、どんどん大きくなっていく希望に背中を押されて、彼女は訊いた。「約束の血なのね、キーシュ。あれは、あれは、つまり首ってことなのね……？」

「そうだ」

「すごく新しいのね。そうでなければ、血は凍っているはず」

「そうだ。まだ冷たくなってない。新しい。斬ったばかりだから」

「キーシュったら」。彼女の表情はパッと明るくなり紅潮した。「わたしのためなのね」

「そうだ、お前のためだ」

かぶせた鞆し皮の端を掴むと、包みが開くように引き剥がした。人の頭が彼女の前に転がった。

「三つ」。凶暴な言葉を囁いた。「いや、少なくとも四つだ」

ところが、彼女は身動きできなくなっていた。そこに転がっていたのが、優しい顔のネクター、ごつごつした顔のグノブ、上唇がめくれ上がり彼女をあざ笑うかのようなマカムック、そして最後に、昔からの癖で險が引き摺り、

少女のような頬の上で意味ありげに目くばせをしているノサボックだったからだ。焚き火の揺らめく光に照らしだされ、そこに彼らは転がっていた。その四つの頭から血が漏れだし、雪原を深紅に染める丸が膨らんでいった。

焚き火の熱で、グノブの首の下の雪が解けていた。それで、まるで生きているかのように、グノブの首が転がった。あちこちごろごろと転がり回ったあと、彼女の足下で止まる。スूसーは動けなかった。キーシュもまた動きを失い、じっと座ったままだった。しかし、目はスूसーのことを凝視している。

森の中で、重みに耐えかねた松の木が雪を落とした。その音が木霊し峡谷に吸い込まれていった。それでも二人は動かなかった。短い日はどんどん暮れてゆく。暗闇がキャンプを包み込もうかというときになって、ホワイト・フングが焚き火に近寄ってきた。立ち止まりクンクン鼻を鳴らしたが、誰にも追い払われないものだから、さらに近づいてきた。急に鼻を横に向けた。鼻孔が震え、背骨の上の毛が逆立つ。そして、臭いに気づき、ご主人さまの首を目指して突進した。最初は遠慮がちに臭いをかいでいたが、やがてだらりと垂れ下がった赤い舌で、主人の額を舐めだした。ひょいと腰を下ろすと、かすかに煌めく一番星にむかって鼻を立てる。そして、長く響く狼の遠吠えをあげた。

ここでスूसーが我にかえった。キーシュをちらりと見やると、彼はすでにロシア・ナイフを抜いていた。そして自分をじっと見つめている。彼の表情は厳格で、意志は固まっている。そこに、彼女は掟を読みとった。パークのフードを下ろし首もとを露にすると、彼女は立ち上がった。一度止まって、辺りをゆっくりと眺めてみる。周りを囲む森、空のかなたで瞬く星、キャンプ、雪に埋もれた雪靴。生活全般を、命ある生活を確認するための最後の一瞥。横からそよ風が吹き、彼女の髪を揺らした。深い深呼吸をしながら、彼女は向き直り、真っ直ぐにキーシュと対面した。

そのとき、スूसーは、結局産まれくることのなかった赤ん坊を思った。

キーシュの目の前まで進むと、彼女は言った。「準備はできてる」

### 【訳者付記】

短編集『氷点下の子どもたち』に七作目として収録されている作品。執筆は、短編集のなかで最初の作品「生命の掟」(1900年4月18日)から約一年以上を経た、1901年7月のこと。この二作品のあいだの一年間には、代表的なものとして『雪原の娘』(*A Daughter of the Snows*)や『ケンプトンとウェイスの往復書簡』(*The Kempton-Wace Letters*)、第二短編集『彼の祖父たちの神』(*The God of His Fathers*)に収められる短編作品などが執筆された。

この作品「キーシュの息子キーシュ」を出発点に、作家は、「嘘つきナム・ボック」、「白人のリ・ウォン」、「サンランダーズ」、「魔法のマスター」の同一短編集収録の計五作を、1901年9月末までの約二カ月のあいだに、連作で書きあげた。『氷点下の子どもたち』のための短編を次々と書いていたよ(1901年10月9日付。Letters, p. 256-257)と語る、クラウズリー・ジョンズ宛の手紙でロンドンが言及しているのが、これら五作品のことである。

また、ロンドンが『野性の呼び声』(1903年7月刊行)などさまざまな作品を書籍としての発表するに際して、また生涯つき合うことになるマクミラン社のジョージ・ブレットとの親交は、この短編集から始まる。ロンドンの才能に惹かれたG・ブレットが「あなたは現在、最良の作品を発表している。未発表の作品が手元にはないか」(Letters, p. 267)とロンドンに賛辞を送り書籍出版の可能性を問い合わせたのがきっかけだ。これに作家が初めて返信したのが、1902年1月のこと(Letters, p. 267)。1902年1月16日付のブレット宛の二通目の手紙では(Letters, p. 272)、『氷点下の子どもたち』の出版がほぼ決まっている。

本短編作品の内容であるが、娘を「売り」に出す父グノブといい、人殺し

ができなければ男でないと言う娘スースーといい、「誰かを殺してこい」と言われたら恋人の父親と兄弟たちをみな殺してくる主人公キーシュといい、現代の「政治的な正しさ」の観点、感受性からみれば、とんでもない作品である。しかし、この残虐性・反ヒューマズムについてはとりあえず目をつぶるということにすれば、現代においても読む価値のじゅうぶんにある作品であると思う。

作品が示す暴力性と暴力愛好の傾向は、クロンダイクものには散見される。たとえば訳出済みの「極北の森」、「狼の息子」、「ボルポータックの知恵」などを例として挙げるができるだろう。荒野であるフロンティアの生活、自然と戦い、獣や敵と戦う生活を誇張したものと考えられる。確かにロンドンは、「喰うか喰われるか」の極限状況での、アクション豊富な決闘の場面を書くのを得意とした。しかし、ロンドン自身がこれらの暴力的ドラマが好きで好きでたまらなかったとは想像しづらい。彼自身の狩や闘牛への姿勢をみれば（どちらかといえば嫌い、か積極的に嫌悪した）、躊躇うことなく暴力を描きはしたが、それはおそらく、人生と人の真実の一面である憎悪、敵対、暴力から目を逸らそうと必死の努力をしたヴィクトリア朝文化への批判がおもな動機だったろうと思われる。当然、読者たちがそれを求めていたという、市場経済の歴史的事実もあるだろう。モノの交換という平和的状况は、ファンタジーとしての暴力を希求するものなのかもしれない。当然、帝国主義の時代という背景もある。

短編作品のプロットは衝撃的である。リアリズムを越えてじゅうぶんにドラマチックである。白人文化、キリスト教文化に感化されたインディアンが最初、殺しを拒むが、それを強要されて、結局、娶りたいと思った娘の親族四人を殺害し、その娘自身も殺すことになる。白人対原住民という大きな歴史の流れのなかでは、ほとんど民族の自殺に近い話である。クライマックスへの導入部で、初めてブラウン牧師を登場させ、主人公にハックルベリー・フィンまがいに「わたしは地獄へ行くのです」と宣言させる場面は、秀逸と

いうしかない。

ロンドンは、クロンダイクでこのような経験をしたわけでも、そんな場面を目撃したわけでもない。ロンドンのクロンダイクで足跡を作品中心に丹念に辿ったフランクリン・ウォーカーや、短編を中心にクロンダイク作品自体を緻密に読み解き評価したジェイムズ・マクリントックもそのように書いている。ロンドンのネイティブ・アメリカンとの直接的接触はきわめて限定されたものだった。しかし、タナナウ族やスランゲット族は実在し、神話的要素を付加されてすでに世紀転換期の文献において紹介されていた。作家はこれら文献をリサーチし、クロンダイク滞在時に古株の住人（サワードウ）に話を聞いてまわったのだろう。そんな材料から作家は、このようなドラマを想像力で創作した。したがって、当時の人種（間）表象としてはじゅうぶんに信頼のおけるもので、文化の無意識ないし潜在意識という意味では、大いに参考になる。言うまでもなく、それは白人の側が抱いていた意識という意味においてであるが。

なお、この短編には「キーシュの物語」（“The Story of Keesh”。短編集『生命への執着』[*Love of Life*] 収録）という、この作品の主人公の父親を描く続編が存在する。民族・人物の「系譜学」に偏執的にこだわる作家は、「息子」を主人公にした短編を書いたら父親の物語を創造せざるを得なかったようなのだ。作品の完成度、主題の深さなどからみて、本作と並ぶ作品とは言いがたいが、キーシュという人物、タナナウ族やスランゲット族などの存在、その歴史への作家の関心の深さはうかがわれるだろう。

注目すべきは、以下の諸点であると考えている。

- (1) ホワイト・ファンクという犬と狼の混血の犬（訳文では「狼犬」と訳した。“wolf-dog”が原語の表現）が登場すること。混血。『野性の呼び声』のバックもそうであるが、肉体において「女の交通」が実現されていることに作家は注目した。もちろん、ホワイト・ファンクは『呼び声』



のコンパニオン・ピースである『ホワイト・ファンク』の創作上の「親」になるわけだが、それより、最後の場面で犬をさりげなく、しかし最大限に効果的に登場させた作家の力量は、けっして軽視できないと思う。名作「火を熾す」(“To Build a Fire”)の緊張感に近いものを——拙訳において再現できているかは心許ないが——、この最後の場面は獲得している。

- (2) 「極北の森」にも、この「狼犬」のような傍観者・観察者的な犬は登場していた。不思議な雰囲気をつくりだす、ちょい役的な犬である。よく知られているように、ロンドンが自分をウルフと意識的に呼びはじめるのは『海の狼』の頃からのことであり（正確には、1905年4月6日付クラウズリー・ジョンズ宛の手紙より）、その自己定義は、本人が意識できないほどに曖昧なかたちであったにせよ、白人族を意味する『狼の息子』の頃からあったのだろう。そしてそれが『呼び声』の大成功により、よりパブリックなものになったと考えられる。このような経緯からすると、たとえ不思議な雰囲気を巧妙につくりだすだけのようと思われる傍観者の犬ではあるが、作家ロンドンその人の位置を思わせ、まるで作家が小説内に最初からいたとすら推測することが可能である。

だとすれば、ロンドンの特徴的な自伝語り、『アメリカ浮浪記』(*The Road*, 1907)から始まる「自らの経験を題材」にした一連の作品の下準備が、おそらく最初から無意識になされていた、ともいえる。「経験」を編集したというより、経験を「創造」したのである。ジャック・ロンドンに作家としての天才があるとすれば、この点においてではないだろうか。

- (3) インディアンを意味する「大鴉族」(the Raven)と白人を意味する「狼族」(the Wolf)の、トーテム的な対立において人種対立が描かれている。この二族による関係は、「狼の息子」や「魔法のマスター」でも採用されており、クロンダイク作品が提示する世界が「抽象的象徴字

宙] (“abstract symbolic terrain,” Jonathan Auerback, Explanatory Notes to *Northland Stories*, p. 283) であるとするのなら、オーエルバックが主張するように、ロンドンの考えた白人男性性とは、生物学的に決定されるものというより、「獲得され達成され勝ち取らねばならないある状態」(Introduction to *Northland Stories*, p. XVII) と言えるだろう。性差と人種のディコンストラクションを目指したオーエルバックの読解がじゅうぶんな論証に支えられているか、我々がそれを支持できるのかについて即断はできないが、熟考に値する論点であることは間違いない。白人至上主義者としてのロンドン像に、根本的な変更を迫る論点であるからだ。

- (4) 性差の問題とも絡むが、母親たらんとすることを自らのアイデンティティの抛り所とするスースーの描写も興味深い。自分が競りに掛けられることは自明視している彼女は(文化・慣習とはそのようなものだろう)、キーシュとの結婚を値踏みするとき、常に赤ん坊の存在を意識している。そして、それも相当程度に物理的、身体的に。彼女のことは濃密に描かれてはいないのだから、彼女の内面など読者は知りようがないし、短い数カ所の描写においても現代フェミニストなら怒りを禁じ得ない人物造形なのだが(批判されるのは当然、男性作家と男性読者だろう)、長いキャラクターライゼーションができない短編小説の経済において、有効で詩的深さに到達する絶妙な書き方であると思う。が、残念ながら、ロンドンの微妙なさじ加減を再現できず、原文では含意されているに留まる「赤ん坊」の存在を、訳文では直接に言及することで文意を明らかにせざるをえなかった。

彼女の最後の台詞が作品を締めくくっている。「準備はできてる」。言うまでもなく、殺される準備である。彼女ばかりかインディアン全体の運命を示唆しているかのような象徴的な台詞だ。ネイティブ・アメリカンを扱う作品の多くに共通に感じられるものであるが、挑戦と抵抗と反

逆のあとの諦念は、感動的ではある。なぜ白人男性作家のロンドンにこれができたのか。これは解明されるべき謎というより、ロンドンという作家の資質を定義すると言える。人種、ジェンダーの「構築性」、これへの作家の意識を探る必要があろう。『呼び声』のバックに作家の分身的要素を見出すことができるなら、ロンドンがバック、すなわち「インディアン」の位置にいた、とすら想像できる。

#### 参考文献

- Auerbach, Jonathan. *Male Call: Becoming Jack London*. Durham: Duke UP, 1996.
- \_\_\_\_\_ ed. *Northland Stories*. New York: Penguin Books, 1997.
- McClintock, James I. *White Logic: Jack London's Short Stories*. Cedar Springs, MI: Wolf House Books, 1976.
- Reesman, Jeanne Campbell. *Jack London's Racial Lives: A Critical Biography*. Athens: U of Georgia P, 2009.
- Walker, Franklin. *Jack London and the Klondike*. San Marino: Huntington Library, 1966.
- Labor, Earle et al eds. *The Letters of Jack London*, 3 vols. Stanford: Stanford UP, 1988.

(おおや・たけし 理工学部准教授)